

6 歳児は集団に革新をもたらす人物をどのように評価するのか

永森貴人

新規な物事の発見, 既存の物事の新たな組み合わせにより新しい価値を生み出す行為は「革新」と呼ばれ (Schumpeter, 1934), 生物の繁栄 (Sol et al., 2002) や文化の発展 (e.g. Tennie et al., 2009) において重要であることが指摘されている。このことから, 様々な領域で, 革新的な行動や技術, 知識がどのように生まれ, 伝播するのかについての研究が実施され (e.g., Laland, 1992; Nishida et al., 2009), 生物の繁栄, 文化の発展の過程を明らかにしようという試みがなされている。

とりわけ, 発達心理学の領域では, 人はいつ, どのように革新的な行動や技術, 知識を生み出すことが可能になるのかという観点から革新に関する研究がおこなわれてきた (Beck et al., 2011; Carr et al., 2015)。その結果, 革新的な行動は発達の初期では難しく, おおよそ 8~9 歳ごろから徐々に見られる比較的高次の能力であることが明らかにされている。

一方で, 子どもたちが革新的な人物をどのように評価するかについては十分な検討がなされていない。革新的な人物に対する子どもの評価は, 子どもが革新的な人物を模倣対象とみなすか否かに関わりうることから (Hermes et al., 2016), 革新的な文化や技術の伝播に対する理解の一助となる重要な知見となりうる。そこで, 本研究では, 子どもたちの革新者への評価を検討した。

実験 1 では, 6 歳児 29 名を対象に, 同調的なエージェントや非同調的なエージェントと比べた際に革新的なエージェントがどのように評価されるのか調査した。参加者は, 同調的なエージェント, 非同調的なエージェント, 革新的なエージェントのシナリオを聞き, 各エージェントに対する評定を行った。その結果, エージェントに対する評価は条件間で有意な差はみられなかった。ただし, 実験 1 のシナリオは, 参加者と無関係の民族を想定していた。そのため, 参加者はシナリオの内容を自分と関係のない物事として認識したゆえに, 評価に歪みが生じた可能性があった。

そこで, 実験 2 では, 6 歳児 30 名に対して, 参加者自身もシナリオ内で登場する架空の民族の一員であるように思わせるために, 民族の絵が描かれたバッジを参加者に着けるという手続きを追加して, 再度, 調査を実施した。その結果, エージェントに対する評価は条件間で有意な差はみられず, 6 歳児はいずれの条件に対しても同様の評価をしていた。

実験 1, 2 の結果から, 6 歳時点では, 同調的な人物, 非同調的な人物や革新的な人物に対して同様の評価をおこなっていることが示唆された。先行研究では, 子どもたちが自ら革新的な方法を見出すようになるのは 8 歳以上であると示されていることから, 6 歳児は革新という概念を理解するには幼く, 本研究における革新的な人物の行動や集団に及ぼす影響を深く理解できなかった可能性が考えられる。

以上の結果を踏まえ, 今後は, 対象年齢を広げて子どもたちがいつ革新について理解するのかを検討するとともに, 同調, 非同調, 革新の 3 種類のエージェントを実際に子どもたちが模倣するかを検証することで, 子どもたちがいつどのように革新的な人物からその技術や知識を学習するのかを明らかにすることができると考えられる。(比較発達心理学)